

情報技術にみる 「連携」と「規律」

執行役員情報技術本部長
嶋本 正

この2002年中に最も注目を浴びるだろうといわれている情報技術のキーワードに「ピア・ツー・ピア」と「ウェブ（Web）サービス」がある。ともに個人や企業間の情報「連携」を強化する技術であり、これらを的確に活用することによって、企業や社会を支える情報システムの能力を飛躍的に向上させられるものと期待されている。

簡単に、この2つのキーワードの意味するところを見てみよう。

「ピア・ツー・ピア」という技術は、パソコン同士が直接データをやりとりしながら、その範囲を広げていって、多数のパソコン間での情報のやりとりや共有を可能にするものである。

この新しい技術は、従来はサーバーという管理をするコンピュータのもとではできなかったことを実現した。その特徴は、管理をするコンピュータの接続能力や処理能力の制約を一切受けることなく、膨大な数のパソコン同士を低コストで連携させられるということである。まさに、アメーバ型の連携を可能とする技術といえよう。

一方、「ウェブサービス」という技術は、インターネットを通じて、企業の情報システム同士を容易に連携させることを可能にするものである。

今後、企業が一連のビジネスプロセスを完成させるために、自社にある情報システムだけでなく、他社にある情報システムをも利用するケースがますます増えてくる。「ウェブサービス」は、インターネットを介して、自社が必要とするサービス（他社の情報システム

ム)がどこにあるかを見つけ出し、それを自動的に利用できるようにする仕組みである。企業情報システムのワンストップサービスを可能にする連携技術といえよう。

いずれも「連携」を促進する技術だが、そもそも「連携」の意義とは何であろうか。

1つは、自力のみでは完結できない一連の業務を遂行するために、他者の力を借りることである。これは、サプライチェーン・マネジメントが、多くの企業の情報システムを連携して初めて成り立つということからもよくわかる。

もう1つは、自力のみでやろうと思えばできるのだが、そうすると業務遂行のスピードやコストの面で競争力を確保できないので、自身の得意でない部分は、他者にゆだねようということである。自社のコアコンピタンス(競争力の中核)を明確にし、そこに関しては自社で情報システムをつくるが、その他は他社の情報システムとの連携によって、コスト競争力の強化や変化への対応を図ろうというケースがこれに当たる。

このように「連携」は、企業や社会が効率的かつスムーズに運営されるための重要な要素である。それを支える情報技術にいいよ注目が集まってきたのである。

しかし、「ピア・ツー・ピア」と聞くと、インターネット上で音楽ファイルが無償で交換するシステム「ナップスター」を思い出し、著作権侵害のような新たな問題が起こることを懸念される方もいるだろう。

また、「ウェブサービス」にしても、イン

ターネット上に公開されたサービス(情報システム)の内容が事実と異なった場合の取り扱いなど、解決すべき課題が多くあることも事実である。

こう見てくると、「連携」を進めるためには、その連携への参加者同士の信頼関係が大きな前提になるということが浮かび上がってくる。

従来の情報システムは、センターでコントロールするコンピュータがあり、そこで参加者をすべて把握し、必要なチェックや監視を行っていた。しかし、「ピア・ツー・ピア」や「ウェブサービス」のように「連携」を主眼とした仕組みでは、そういった監視機能を保持するにしても、参加者自身の「規律」が極めて重要になってくるのではなかろうか。それにより、参加者同士の信頼関係を維持し続けることで初めて、企業や社会が効率的かつスムーズに運営されるための情報技術として、足場を築けるであろう。

米国の経営コンサルタント、ジェームズ・C・コリンズはその著書の中で、良い会社から偉大な会社へと飛躍的に成長するためには、「規律ある人材」「規律ある考え」「規律ある行動」が必要になると述べている(山岡洋一訳『ビジョナリーカンパニー 飛躍の法則』日経BP社、2001年)。

「連携」を促進する情報技術を企業や社会の運営に活かして飛躍を目指すために、いま一度、「規律」を持った個人、企業の確立に目を向ける必要があるだろう。

(しまもとただし)